

老年期における「老い」について

○ 山本 恵子

(大 阪 大)

目的 本調査では、「高齢者が年をとったと感じること」を「老いの意識」、「高齢者が自らを老人であると認めること」を「老人意識」と名付け、「老いを感じること」が即ち「老人であると認めること」を意味するのかを明らかにするため、ロジスティック回帰分析で、「老いの意識」/「老人意識」の有無の予測に有効な変数を推測し、さらに「老いの意識」と「老人意識」との相違を検討する。

方法 60歳以上の男女421名を対象に、「老いの意識」、「老人意識」、それらの形成に関連する要因と想定される質問項目などで構成されたアンケート調査を行った。

結果 「老いの意識」の有無の予測に有効な変数として、「老いの捉え方」、「生活満足度」、「世帯数」、「衰退意識」が得られた。影響の方向性を考慮してまとめると、「老いの捉え方が否定的であり、生活に満足しておらず、世帯数が少なく、衰退意識を持つ人」ほど、老いを感じていると答える。ただし、生活満足度は有意ではなかった。「老いの意識」と最も強く関連のある変数が「老いの捉え方」であった。

「老人意識」の有無の予測に有効な変数として、「老いの捉え方」、「性別」、「年齢」、「世帯数」、「孤独感」、「衰退意識」が得られた。影響の方向性を考慮してまとめると、「老いの捉え方が否定的であり、女性であり、年齢が高く、世帯数が多く、親身になって話を聞いてくれる相手が多く、衰退意識を持つ人」ほど老人であると答えやすい傾向がある。「老いの意識」の有無を予測する変数と比較すると、種類や影響の方向性が異なる。また、①老いの意識を持つ人の約21%の人が自らを老人と認めていないこと、②両者を感じる理由に異なる項目が多く見られること、これらを考慮すると老いの意識と老人意識が全く一致するとはいえず、「老いの意識」と「老人意識」を同様に扱うことは安易であると考えられる。